

# 日本ボストン会会報

発行所 日本ボストン会事務局

総会ご挨拶

## 日本ボストン会へのご挨拶

会長 井口 武夫

日本ボストン会の皆様、本日は創立10周年を記念する総会を開催する目出度い日であります。ここに日本ボストン会の繁栄を心からお祝い申し上げると共に、私が出席できないことを申し訳なく思います。

日本ボストン会の会合を通じてボストン・ニューイングランド地域で築かれた我々の友好の絆を帰国後も続けることができ、10年にわたってお互いに家族を交えて仲良くおつきあい出来ましたことは本当に素晴らしい事だと思ひ、この会に感謝いたします。

これもひとえに当会の育成と運営に力を注がれた茂木賢三郎会長、高木政晃元会長、藤崎博也元会長、藤盛さん、俣野さん、その他の幹事・役員の方々を始めとする会員の皆様方のご熱心な協力の賜物でございますので、ここに改めて御礼申し上げます。

私もボストンは第二の「ふるさと」と考える一人でありまして、外務省から初代のボストン総領事として赴任したのが1980年7月で、22年前のことです。赴任前に俣野さんからマサチューセッツ港湾局の説明を受けたり、着任してからは日本電気の高木さん、日本電子や丸紅、三菱商事その他日本企業の方々にブリーフをしていただいたりして、楽しくお付き合いしたのがついこの間であったような気がいたします。

ボストンの土地柄からHarvardやMITその他の大学の学者や研究者の方々とも親交を暖めることが

できましたのも懐かしい思い出であります。また、ボストン・マラソンには長男の治夫が何年も青梅マラソンの方達と参加いたしました。

今年、茂木会長から微力ながら私が新しい会長の重任をお引き受けすることとなり、何よりもこの総会には出席いたすつもりでしたが、大学の教鞭をとる者として重要な発表がある国際政治学会が同じ日取りに淡路島で開かれる結果となり、どうしても日程の調整がつかないために残念ながら欠席するの止むなきに至りました。それで、誠に心苦しい次第ですが、このメッセージを高木元会長にお願いして読んでいただく形で皆様にお伝えすることをご寛恕ください。

伺うところでは、ボストンのジャパン・ソサイエティでは2年後の2004年に創立100周年の記念行事を準備されているとのことでもあります。ボストンのジャパン・ソサイエティは我々とは事実上は兄弟のような親しい間柄にあってもおかしくないでありまして、今後の動向によっては、この行事に何らかのお祝いの気持ちを表す必要があるかもしれません。「同気相求める」のことわざもありますので、その際は皆様のご理解とご協力をえたいと考えておりますので、宜しくお願いを申し上げます。

ここに皆様のご健勝と日本ボストン会の益々のご発展を祈って、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

### 日本ボストン会イベント

観桜会(千鳥が淵)	3月30日(日)	美術の会(名古屋ボストン美術館)	5月31日(土)
親睦ゴルフ会	4月17日(木)	ハイキングの会(鎌倉)	6月8日(日)
	10月9日(木)	ボストン・ポップス・ミニコンサート	7月中旬(未定)
会報次号原稿締切	8月末	10月初発行	総会
			11月14日(金)

## 観桜会

## ご挨拶

茂木賢三郎

皆様、日本ボストン会が目出度く創立10周年を迎えましたこと、心からご同慶に存じます。思い起こしますと、創立総会は大岡山の東京工業大学のホールで行われたのでございますが、つい先日のことのように思われ、月日の経過の早いことに驚かされます。本日は、遠くボストン、北海道、名古屋からゲストの方々をお迎えして記念の総会を開催することが出来ますことを、まことに嬉しく存じます。遠来の皆様を心から歓迎申し上げます。

過去2年間、会員皆様方のご推薦により私が会長を勤めさせていただいたのでありますが、あまりお役に立てませんでしたことを申し訳なく存じております。特に後半の1年は、腎臓結石とそれに続く腰痛に悩まされ、幹事の皆様に大変ご迷惑をかけました。それにもかかわらず、任期の1年目には美術の会が名古屋ボストン美術館への鑑賞旅行とか、2年目には歴史を飲む会の札幌への歴史探訪の旅行が実行され、名古屋や札幌におられる「ボストン大好き」の強い思いを有する方々との交流が実現できました。この他にも、本会が極めて楽しく有意義な活動を展開してこられましたのは、藤盛副会長をはじめ各担当分野で実に積極的に動いてくださった多くの方々のおかげでありまして、心から感謝申し上げます。

私はこの記念大会をもって退任させていただきませんが、次期会長はすでに井口武夫さんにご就任いただくことが決定しておりますし、またその後は不文律ではありますが、私が退任に当たって適任の方を探すということになっておりまして、佐々木浩二さんに白羽の矢を立て、ご本人の内諾と幹事会のご賛同をいただいております。本会が、「ボストン大好き人間」という共通項を持った人々の集いとして、ますます発展することを確信して退任させていただけるのは、まことに有り難いことでもあります。

結びに、会員皆様方の一層のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、ご挨拶と致します。

## 2003年お花見へのお誘い

2003年度のお花見は開花が早いと予想して、3月30日(日)としました。

春爛漫の桜の下で夜桜を楽しみましょう。例年、40名程度のご参加をいただいております。

昨年は新しい参加者も増え、楽しい宴会でした。幹事は午後5時30分から6時までの間、元のフェアモントホテル(今はマンション建築中)付近で皆さんをお待ちしております。参加ご希望の方は、3月19日(水)までに幹事藤盛(下記)までご連絡下さい。

幹事の携帯電話は [ ] です。当日何かありましたらこちらにご連絡下さい。小雨決行予定です。雨の夜桜も良いものと思います。

## 記

開催日: 2003年3月30日(日)  
お花見の場所: 千鳥が淵(地下鉄東西線、半蔵門線、都営地下鉄「九段下駅」2番出口より徒歩)。

集合場所: 千鳥が淵、旧「フェアモントホテル」(現在、三井不動産パークマンション千鳥が淵建設中)付近

時間: 午後5時30分から6時の間に旧ホテル付近に集合。6時から全員で、飲物を片手に付近を散策、記念撮影等。

宴会開始時間: 午後7時(6時30分から入場可)

会場: 「九段会館」(地下鉄「九段下駅」前)

千代田区九段南1-6-5

☎03-3261-5521

費用(予定): 食事 6000円

飲物 1500円(2時間飲み放題)

散策用飲物他 500円(缶ビール 写真代)

合計 約 8000円

申込先: 藤盛紀明

申込み締切り: 2003年3月19日(水)

美術の会

## 名古屋ボストン美術館の旅

実施要領案内(第1報)

名古屋ボストン美術館が開館されてから早くも5年目を迎え、第3回目の鑑賞の旅を企画いたしますので、皆様ふるってご参加下さい。詳細は現地との打合せの上、今後日本ボストン会のホーム・ページで逐次掲載してお知らせします。

### 記

1. 美術鑑賞: 印象派とボストン  
(美術館学芸員による解説を予定)
2. 日時: 2003年5月31日(土)  
現地12時45分集合
3. 集合場所: 名古屋ボストン美術館1階  
(JR金山総合駅南口徒歩1分)
4. 交通案内: 金山総合駅  
(JR名古屋駅より中央線、又は東海道線で1駅)
5. 懇親会: 美術鑑賞後、日本ボストン会会員と現地在住会員との懇親会を予定。  
(名古屋・久米生光氏と打合中)
6. 解散: 同日午後8時頃現地解散(予定)
7. 問合先: 美術の会幹事  
酒井一郎

歴史を飲もう会(予告)

### 江戸庭園(船)浅草

浜離宮を散策の後、船で隅田川を上り浅草を尋ね、あと会食(天ぷら)。時期は秋口(10月頃)を考えています。

連絡先: 篠崎

The Japan Society of Boston, Inc.

## ボストン日本協会

### 創立百年祭記念行事

2004~2005

#### 概要

北米において一番歴史の古いボストン日本協会は、2004年から2005年にかけて創立百年祭記念行事を計画している。

この歴史的に記念すべき年を迎え、ボストン日本協会は日米関係に関連する多くの行事計画を立案中である。

その創立百年祭記念行事の中には、次の様なプログラムを予定している。

- ①ボストンの中心街に日本庭園を造置する。
- ②大歌舞伎の北米興行。
- ③多くの展覧会、シンポジウム、映画祭、その他各種の芸能行事開催。

この様な創立百年祭記念行事を北米および日本で開催するための資金募金、およびボストン日本協会の基金増強のためのキャンペーンを近く開始の予定である。

#### 創立百年祭記念行事

創立百年祭記念行事は、ニューイングランドと日本との関係を祝う一年余の行事として、且つ同時にボストン日本協会の財政基盤強化の機会として企画されている。

キャンペーンは2004年春から翌05年秋までの期間に亘り、幾つかの大規模イベント開催が企画されている。イングランドおよび欧州各国において開催された行事に相当する、「フェスティバル イア オブ ジャパン」として名付けられ、日本伝統文化と現代文化紹介の行事として開催・実施される。

幾つかのプログラムはボストン日本協会により直接企画・実施されるが、この他にもこのキャンペーンに賛同する、多くのニューイングランドの有力文化機関による独自の行事企画が進められている。

(ボストン日本協会百年史、英文、別項参照)

The Japan Society of Boston, Inc.

## CENTENNIAL OF THE JAPAN SOCIETY OF BOSTON

2004 - 2005

**HISTORY** -The Japan Society of Boston is the oldest of thirty-seven Japan-American Societies in the United States. It was established in Boston in 1904 as an forum for American educators, businessmen, public officials, and cultural leaders to meet each other and Japanese counterparts and to exchange ideas and share interests relating to Japan and relations between New England and Japan. It was the time of the Russo-Japanese War and a historical moment when Japan's international involvements were becoming more prominent and her international activities - commercial, cultural, and military - were assuming greater importance in the minds of forward looking Americans.

In 1904, Boston and New England had long been at the forefront of America's relations with Japan. Much of the American whaling industry and shipping trade, which had first drawn American ships, mariners and explorers into Pacific waters and into contact with Japan, was based in Boston, Salem, New Bedford, Nantucket and other New England ports. Nagahama Manjiro (known as "John Manjiro"), generally believed to be the first Japanese individual to live in the United States, was rescued at sea by a vessel out of New Bedford and was brought by the ship's Cap. Whitfield, to be educated in his home in Fairhaven, Massachusetts. Commodore C. Matthew C. Perry, the American naval officer responsible for "opening" Japan in 1853-54, was a native of Newport, Rhode Island. Many of the earliest teachers (known as *oyatoi-sensei*), hired by the Meiji Government to teach Western languages, science, technology, and culture in the rapidly modernizing Japanese society, were from New England universities. Distinguished professors such as Edward Sylvester Morse, William Clark, Earnest Fennollosa, and others who spent extended periods teaching in Japan and played a key role in the intellectual exchanges with Japan during the late 19<sup>th</sup> century made their homes in Boston, Cambridge, and nearby New England university towns and cities. The personal relationships they developed in Japan and their writings and teaching about Japan inspired students, friends, and colleagues to travel to Japan with increasing frequency, to collect Japanese arts and artifacts, and to extend cultural, educational, and commercial interchanges with Japan throughout the latter decades of the 19<sup>th</sup> century.

It was entirely natural that the first Japan Society in America should be established in Boston. By the turn of the 20<sup>th</sup> century, an extensive network of individual and institutional relationships had developed between New England and Japan, and Boston was the cultural, intellectual, and commercial capital of the United States. Japan was much on minds of leading citizens of Boston in 1904, when the Pacific nation went to war with Russia, and there were already numerous and varied ties linking New England to Japan. The hereditary homes of wealthy New England sea captains were richly stocked with artifacts brought back from Japan, and their gardens were beautified by numerous species of trees, shrubs, and flowers that had originated in Japan or elsewhere in Asia. The libraries of several of the great universities of New England were already enriched by collections of books and documents from Asia. Perhaps most notable of all was the collection of Asiatic arts at Boston's Museum of Fine Arts: many of the founders of the Museum had identified Asian art as a significant area for collecting and had donated their Japanese and Chinese treasures to the Museum, making it - almost from its very establishment - the world's foremost collection of Japanese art outside Japan.

Nowhere in the Western world was Japan more a topic of interest and study than in Boston. It was considered important for well-educated citizens to be knowledgeable about Japan, and Japanese culture (both traditional and contemporary) was a subject of intense interest in Boston press as well as in universities and salons. It was also fashionable among the leading families of Boston to have a "Japanese room" in their homes (for examples, the Japanese fan room in the Longfellow House in Cambridge) and to have portraits painted in Japanese dress or in vaguely Japanese aesthetic style. New England poets and literary figures read Japanese

(Continued on page 5)

CENTENNIAL OF THE JAPAN SOCIETY OF BOSTON

(Continued from page 4)

literature and were intrigued and influenced by *haiku & waka* and by the poetry of Noh theater. Essays and lectures on Japan by American or Japanese specialists were popular events. The legendary friendship of the Boston art collector and socialite Mrs. Isabella Stewart Gardner and Okakura Kakuzo (Tenshin) resulted in his regular appearances at her salon, where he delivered lectures on Japanese aesthetics which later became the best-selling book called *The Book of Tea*. Okakura was also instrumental in building the Japanese collections of the Museum of Fine Art. Edward Sylvester Morse, a passionate collector of Japanese arts and artifacts, presented his huge collection of Japanese ceramics to the Museum of Fine Arts and his even larger collection of artifacts of daily life and Japanese material culture to the Peabody Museum of Salem, where he served as Director. His collection of Japanese arts and artifacts remains exceedingly valuable today as a unique "time capsule" of Japanese life and culture during the late-Edo and early-Meiji periods.

When the Japan Society of Boston was created in 1904, it was considered a much-needed forum for exchanges with Japan of all sorts. The new Japan Society sponsored research and public events on Japanese themes, arranged exhibitions and educational programs, assisted in the publication of scholarly and popular writings about Japan, sponsored conferences and social occasions designed to deepen American expertise about Japan. Much as it does today, it served in many ways to foster ties between Japan and America and to enrich the culture life of New England.

The Japan Society Today —The Japan Society of Boston continues to uphold the mission and ideals on which it was established a century ago. Its membership has grown in size to more than one thousand individuals and corporations, and it plays an active role in the Japan-America relationship. It enjoys strong collaborative relationships with most of the leading educational and cultural institutions in New England and is constantly extending its ties with institutions in Japan as well. Annually, the Society sponsors many programs relating to Japan: cultural events, exhibitions, film series, lectures, conferences and symposia on matters of current public affairs or business related issues. It actively supports the Kyoto-Boston sister-city relationship and the Hokkaido-Massachusetts relationship. In recent years, the Society has also made efforts to extend its relationships beyond the metropolitan area of Boston and Cambridge to collaborate with many universities and other institutions throughout New England.

Boston's heritage of relationships with Japan is uniquely strong, and the Japan Society of Boston takes full advantage of its special history in extending that heritage in ways that are of interest and importance to the present day and to the future. In developing its programs, the Society also benefits from the extremely broad range of personal and institutional relationships enjoyed by its Board, its staff, and its membership with individuals and institutions in Japan. In myriad ways, the Society serves as source of information about Japan and nexus for bi-national relationships in the private sector.

Centennial Celebrations —The Centennial of the Japan Society of Boston is being planned as a year-long celebration of New England's relationship with Japan and as an opportunity to strengthen the institutional base of the Society itself. The Centennial "year" will run from the spring of 2004 to the fall of 2005 and will be highlighted by a number of high-profile events. The Centennial celebration will also serve as the vehicle for a major capital campaign that will support a series of large-scale Japan-related events in Boston and will also build a permanent endowment to insure the financial security of the Society.

The Japan Society's Centennial will be a "Festival Year of Japan" comparable to similar major expositions of Japanese traditional and contemporary culture in England and other European countries. While certain programs are being planned directly by the Society itself, many others are planned independently by New England's leading cultural institutions in honor of the Society's Centennial.

ゴルフの会

ハイキングの会

第18回ゴルフ懇親会

紅葉台ハイキング

実施日2002年5月19日(日)

近藤宣之

幸野真士

2002年第2回のゴルフ懇親会は10月10日(木)、千葉県泉カントリークラブで開催いたしました。

今回の参加者は5組のご夫婦を含めて16人で、4組でラウンドしました。

幸いに天候に恵まれ、コンペと言うよりは懇親を深めることができました。

主な入賞者は次の通りです。

- 1位: ネット82 (グロス90) 伊藤道生
- 2位: ネット83 (グロス101) 西川文夫
- 3位: ネット84 (グロス94) 伊藤英徳
- BB: ネット96 (グロス127) 藤盛富美子
- BG: 90 伊藤道生

1994年から始まったゴルフ懇親会も今回で合計18回になり、今年の秋には20回記念大会を開催することになります。

今年の予定は次の通りです。

第19回: 2003. 4. 17 (泉CC) 6組24人

第20回: 2003. 10. 9 (泉CC) 6組24人

参加希望者は幹事までご連絡下さい。

近藤

ハイキングの会 (予告)

イワタバコ咲く鎌倉散策

日時: 2003年6月8日(日) 午前10時30分

集合場所: JR鎌倉駅(予定)

コース: 田楽辻子の道~報国寺~鎌倉市子ども自然ふれあいの森~ハイランド住宅地~明石橋~浄妙寺~鎌倉駅

花の咲く時期等により変更があります。参加希望者は事務局までお知らせ下さい。

連絡先: 土居

春のハイキングは、富士山を北麓から良く眺められることで知られる足和田山(標高1,355米)を歩きました。

当初は新宿を高速バスで午前7時に出発し、富士急行川口湖駅に午前9時に集合を予定。河口湖駅からはバスで登山口(一本木)まで行き、富士五湖全てを展望する足和田山(別号五湖台)を經由して紅葉台まで歩き(所要時間約3時間)、帰路は温泉入浴を楽しんだあとで、JRホリデー快速ピクニック号で新宿に午後6時頃に戻る計画でした。

当日は前日からの雨天で足場の悪化が懸念されたために参加者が5人にへり、急遽交通手段を自家用車(土居氏提供)に変更、道の駅「鳴沢」に車を停めて、9時15分ハイキングを開始しました。

Rt. 139の側道を通り、一本木の先から登山開始。途中結構険しい箇所もあったが、道は比較的良く整備されており、気持ちよく登ることができました。

午前11時25分に足和田山に到着。曇り空と生い茂った樹木のせいで五つ全部の湖面は確認できなかった。この先は緩やかな下りになり、午後1時10分に三湖台(1,203米)に到着し、昼食休憩。

ここからの富士山の眺めは素晴らしいはずであったが、生憎の天候で一部しか見えなかったのは残念であった。ここで朝からおかしかった天気がさらに崩れて雨が降りだしたが、雨合羽を使うほど酷くはなかったのが幸いでした。

その後、紅葉台(1,165米)を経てRt. 139を通り、午後2時45分出発点の道の駅「鳴沢」に到着。富士展望の湯「ゆらり」という温泉で足の疲れを癒し、帰途につきました。

当日の参加者は土居夫妻、篠崎夫人、生田氏、小生(幸野)の5人。天気はあまり良くなかったが、登山中、植物に詳しい土居夫人から草花の講義を受けたり、大変楽しい一日であった。

計画、実行を担当された土居ご夫妻、大変ありがとうございました。

## ハイキングの会

## 高尾山ハイキング

生田 英機

11月23日朝9時、縁日並の人出で賑わう京王線高尾山口駅前広場に集合した面子は今日のリーダーの幸野さん、土居夫妻、最熟年の俣野夫妻、當間旦那、山崎夫妻、小生(生田)の9名。

参加者名を知らぬまま電車を乗り継いだ小生が、途中であったのが土居夫妻、奥さんは赤色のユニクロのフリース、ご夫婦で赤色好みの記憶あり。小生がユニクロパンツを仕入れたのは土居さんアドバイスがきっかけであった。奥さんは野山の花に詳しい。今回は野菊以外に出会えず、その蘊蓄を楽しめなかったのが残念。

今日のコースは高尾山口、ケーブルカー清滝駅の右脇舗装道路を始発に、途中、“女坂”、高尾山薬王院経由、海拔600メートルの山頂まで約100分、下りはもみじ台、一丁平経由の稲荷山ルート、途中で少し急勾配箇所もあったが、無難に歩ける短時間物。

出発に先立ち、人込みの端スペースを利用して全員ストレッチ体操。これはリーダー幸野さんの提案。基本に忠実。彼は歩きの専門家、東京歩こう会を初め、各種の歩き仲間と一緒に毎日のように各所に出かけているとか。リーダーシップは最後まで健在であった。軍団の後になり、先になりしながら皆に気を使っておられた。一丁平付近の少々キツイ下り道では、旦那に代わって俣野夫人の手を取っておられた。なかなかやる。名幹事に会えて、この会が更に発展的に継続する予感。

天気は一日曇天、途中局所雨模様。いつも晴れ女を自称し、その実績がある女性群が欠席であったので仕方なし。肌寒い曇天下では、休んでいると寒さが足元から上がってきた。一丁平での昼食時、隣のパーティーが楽しんでいた熱々カップラーメンが気になった。皆が手作り、コンビニ仕入れの“おにぎり”を食べている途中、海外生活経験豊かな山崎夫人の日米比較の弁あり。『日本の主食であるご飯の握り飯。これ英語ではメインディッシュの訳語に相

応しいだろうか。あづまやの中で食事中も降ったり止んだりしたその雨は、“時雨の子供”のような糠雨。丸谷才一氏の小作品にある“横時雨(Rain with the wind)”にでも出会っていたら、中止になっていたろう。今回参加の3女性合わせてのせめてもの天気念力のお陰であった。

休憩しばしの後、雨の中を帰路につく。それにしても俣野夫妻、土居夫妻は仲がいい。歩き始めから、下山後の“茶と饅頭”の小休止までの会話、態度は夫婦のモデルとして全国講演行脚されるのに相応しいのではないか。今回は一人参加の當間旦那は黙々、飄々として自然を満喫されていた。後ろ姿に仏僧のオーラあり。初参加の山崎夫妻は“元気印夫婦”、その歩く早さは脱兎のごとし。下り坂でも同じこと。流れ解散になって7人が朝の出発点に午後1時前にたどり着いた時には、既に帰宅の車中の人になられていたようだ。途中で尋ねると、曰く“ゆっくり歩くとかえって疲れるのよ”と言う返事。他方、小生は初めからゆっくりリズムを決め込んだ。

今回、盛りを過ぎた木々の紅葉鑑賞は諦めて、もっぱら落ち葉探しを試みた。カエデ、モミジ、ケヤキ、カンワ、クヌギ、コナラ、そして大きなホオノキも確認できた。不思議とブナは見当たらない。それに木の実は、大きなホオノ実は勿論、クヌギドングリに至るまで、既に鳥や動物の冬支度に供された後であった。

山頂途中に沢山の句碑が立っていて、これもまた楽しめた。その中の一句にこんなものがあつた。

白日は 我が魂なりし 落ち葉かな

この句を黙読していた時、顔に当たった落ち葉があつたが、後でひりひり痛かつた。白日ならぬ曇天下の風に流されて、思わぬ重力を持った落ち葉であつたようだ。

下山を終えて茶店で休憩。午後2時過ぎに解散。今夜は風呂が楽しみだ。

音楽の会

うたう会

## ボストン ポップスを迎えて クリスマスを歌で楽しむ

関 直彦

酒 巻 則 子

ボストン・ポップス・オーケストラの楽員有志による申し出を得て昨年7月17日、日本ボストン会のためにフレンチ・ホルン4本のユニークなミニ・コンサートが成功裏に催されました。

ボストン・ポップスの正式名称はボストン・ポップス・エスプラナード・オーケストラ。かつてボストンに在住していた頃、チャールズ・リバー河畔で独立記念日を華やかに盛り上げるエスプラナード・コンサートや、シンフォニー・ホールでのギャラ・コンサートを楽しまれた会員も多いことでしょう。

ボストン・ポップスは1885年、ボストン交響楽団の創立者でもあるヘンリー・ビギソンが、夏の間でも楽員に仕事を提供しようと始めたものです。飲み食いしながら気楽に聴ける楽しいプロムナード・コンサートです。

1926年から半世紀にわたって指揮者をつとめたアーサー・フィドラーが現在の形のボストン・ポップスに育て上げ、世界的に有名でユニークな存在にしました。その後を引き継いだのがジョン・ウィリアムスで、作曲家としても数々のお馴染みの曲を生みだしました。現在の指揮者は1995年、20代目として就任したキース・ロックハート。

ボストン・ポップスのメンバーの多くはボストン交響楽団の楽員でもあるので、通常の公演は5月から7月上旬まで。そこで今年も、シーズン明けの7月15日から21日まで日本公演のために来ることが決まりました。その間、再び当会のために一夕を割き、10人ほどの弦と管のチェンバー・アンサンブルを組んでミニ・コンサートをやろう、という申出が昨年来日したKevin Owen氏からこの程ありました。

最終日程が決まるのは来日の1か月ほど前。予告期間が短くて申し訳ありませんが、楽しいコンサートになるでしょう。

演奏は即席でなく、プログラムを組んだり、合わせる練習をしたりと、事前に相当の時間を犠牲にします。そこまで奉仕する目的はコンサート後の交流パーティーで、自由時間を遊ぶよりも日本の人々と交流を深めたいという意向にあります。

問合せ先: E-mail naoseki@inter.net.net

『うたう会』では昨年12月25日のクリスマス、午後2時からクリスマスのうたを歌う会を開きました。参加者は男性4名、女性7名で計11名。それぞれにワインや手作りのケーキ、オードブルなどを持ち寄って、アメリカ式ポットラックパーティーで始めました。手作りの味を楽しみながら、自己紹介や海外での経験話など、いろいろな話で盛り上がり、和やかな雰囲気の中で、腹式呼吸と発声法を輪になって練習。“White Christmas”で気分を盛り上げて、“Silver Bell”、“I wish you a merry Christmas”、“Silent Night”や「赤鼻のトナカイ」など10曲を英語や日本語で楽しく歌いました。ハイライトは、篠崎和子さんによる“O Holy Night”の独唱。美しいソプラノの声に皆うっとり魅了されて、この日の会を終えました。

現在『うたう会』は、酒巻の自宅を会場として活動していますが、会員の増加と、都心部での活動を求める声に答えて、会場を都内に移す計画をたてています。予定場所は、JR新大久保駅から徒歩5分の辻音楽事務所のスタジオ。今まで会場への距離で躊躇されていた方、この機会にぜひご参加ください。

月2回のリーハサルで、曜日、時間などはメンバーの要望で決めたいと思います。ご質問、ご興味のある方はご連絡ください。

連絡先: 酒巻

## 「生け花同好会」の発足

佐藤 花子

様々な流派の「いけばな」の催しのご案内をいたします。ご関心のある方はご連絡下さい。

私は1987年にボストンで“生け花インターナショナル”に入会し、帰国後、東京支部に移籍しました。

東京支部の主な活動は、「いけばな」や日本文化紹介の催しを月例会で開催しております。ゲストの参加を歓迎しております。

幹事: 佐藤

## 美術愛好会

## 鈴木春信—古を思う人(1975?-70)

酒井典子

21世紀になって3年目、未年を迎える。

年の初めにBoston在住の折りに買い求めた春信の浮世絵を飾る。笠森稲荷水茶屋“かぎや”の看板娘お仙の前で無邪気に手まりをする愛くるしい二人の少女、お仙の手に軽くやさしく握られた羽根が今にも動きそうである。繊細な版の表現、そして春信の選ぶ色はやわらかく、線の優美さに花を添えている。ほのぼのとしたお正月の情景である。

幸いにも昨年9月14日から千葉美術館で開催された春信展を鑑賞することができた。二度と、これほどの春信の作品が展示されることはないとのことでした。

江戸のさりげない風俗の様子を描いても、平安時代の雅やかさを感じさせる作品が大部分であった。

人気絵師として活躍した期間はわずかでしたが、1000図以上は数えると言われている春信の作品の中には、平凡な江戸の人々の温かなふれあいがあったり、可愛らしい無邪気な子供達であった。

春信自身の家族環境については、まったく資料がないといわれているが、春信にとって憧れの光景だったのでしょう。

ボストン美術館所蔵品の中から二つの作品を見てみましょう。

\*『店舗八景 台子の夜雨』(明和3年、1766)

釜の湯立ちの音が、夜降る雨の音に似て、聞こえてくる様である。静けさの中の単調な音は、母親の眠りを誘ったのでしょう。うとうとする母親の髪をいじる幼子、姉がじっと見守っている、ほほえましいひとときである。

\*『風俗四季歌仙 神楽月』(明和5年、1768)

陰暦11月の、今で言う七五三のお宮参りの情景である。娘が7歳になると、付け紐を取って初めて帯を使い始める儀式である。両親が娘の成長を願う作品であり、春信の頃になって、江戸庶民の共通の習慣として認識されてきた。

春信に「思古人」という号がある。春信の作品の多くが、古く和歌などに表したいにしえの歌人の心を、春信自身の絵に表現されている。

(次号につづく)



【前期】 店舗八景 台子の夜雨  
鈴木春信



【後期】 風俗四季歌仙 神楽月

鈴木春信

## 幹事会記録

2003年1月17日(金) (出席者19名)

- \*新入会員：森本正夫、松江昭夫、藤田哲3氏。
- \*会長・副会長の英文呼称をChairman, Vice Chairman とすることを決定。
- \*前会長は「顧問」という名称に決定、幹事会にはご都合が良い時にご出席願うことにした。
- \*W.G.の呼称はHPに合わせて「同好会」と決定。
- \*「生け花同好会」の発足を承認。
- \*次回幹事会6月12日(木)午後6時。

## 日本ボストン会2002年度総会

日時2002年11月15日(金)午後6時半～9時

場所NEC三田ハウス芝クラブ

議事 会長挨拶、会計報告、参加者挨拶

新会長選任、活動報告、参加者挨拶。

出席者49名

(遠隔地参加者、新参加者紹介)

Mr. Peter M. Grilli, 理事長、ボストン日本協会

バーンズ 郁子氏、ディレクター、

望月典子氏、プログラム・ディレクター、

中垣正史氏、北海道マサチューセッツ協会、札幌

久米生光氏家族4人、黒川泰子氏、滝沢典之氏

広中和歌子参議院議員、宮崎泰明氏、小田史郎夫妻

\*\*\*\*\*

日本ボストン会創立10周年記念総会は近藤宣之副会長の司会で開会いたしました。

まず茂木賢三郎会長からは過去2年間の活動を回顧しながら、次期会長には第2代会長であった井口武夫先生にお願いし、不文律であるが会長として次々期会長に佐々木浩二氏をお願いすることを決定し任期を終えることになった、この会がボストン大好き人間の集いであることを共通項としてさらに発展することを祈念するとのご挨拶をいただきました。

総会では多数の参加者からのご挨拶を戴く必要から会計報告<sup>1)</sup>は席上に準備してあるので、別途見たいと司会者から報告があり議事に移りました。

まず藤崎博也先生(第3代会長)から、MIT同窓会会長をしていた縁で当会会長になったが、次期会長になって戴く高木政晃氏を副会長にお願いしたこと、代表幹事の肩書を会長に改めたことなど回顧された上で、乾杯の音頭をとっていただきました。

懇親の場の中では、遠路ご参加をいただいたボストン日本協会ピーター・グリーン理事長をご紹介しました。グリーン理事長からは当会が10周年を迎えたお祝いのご挨拶をいただき、Japan Society of Bostonがあと2年で創設100年を記念して幾つもの行事開催を予定しているので、是非東京からも参加して欲しいとご希望が述べられました。

同行されたバーンズ郁子氏、望月典子氏からも、こども、日米和親条約(1854)とかポーツマス条約(1905)に関連させて、幾つもの記念行事が2003年から2005年にかけて予定されているので、個人的都合に合わせて、日本からの参加を要望されました。

札幌から参加された中垣正史氏からは、当会が7月に札幌を訪問したことに関連し、HOMAS 森本正夫会長、松江昭夫副会長から「よろしく」とのご挨拶と共に、当会への入会申込書を預かって上京した旨のご報告をいただきました。

名古屋の久米生光氏からは、来年はまた東京から名古屋ボストン美術館への来訪を期待している旨のご挨拶をいただきました。現在、瀬田市に単身赴任中の滝沢典之氏からは、本日まで参加いただいている山田敬蔵氏にならって又ボストン・マラソンに参加したいとご希望が表明されました。

広中和歌子参議院議員からは、バーンズ郁子氏が来日・出席すると伺ったので参加したとのご挨拶があり、国会に入って16年になるが、国民の政治への無関心を憂いて、健全な2大政党の出現が必要であるとのご意見を伺いました。

次いで、本日、よんどころないご都合でご出席いただけなかった井口武夫新会長からのメッセージを高木政晃元会長(第4代目)が代読されました。

井口会長は当会の創立10周年記念総会の開催へのお祝いの言葉と共に、ボストン・ニューイングランドで築きあげられた友好の絆が帰国後も続けられたことへの感謝と幹事・役員・会員の協力を高く評価する旨のご挨拶があり、ボストンのジャパン・ソサエティの2年後の100周年記念行事には、必要があれば、会員に何らかのご理解とご協力をいただきたいとのご意向の表明がありました。

ここで司会者から会長に井口武夫先生、次期会長に佐々木浩二氏選任の提案があり、ご出席の皆様のご承認をいただきました。

このあと名古屋からご出席の黒川泰子氏の紹介があり、美しいジャンソンの唄声に聞きほれました。

毎年ご出席戴いている山田敬蔵氏からは11月30日に75歳を迎えるが、未だに現役アスリートとして今年ロスアンゼルス(3月)、パリ、ボストン(4月)、ヘルシンキ(8月)のマラソンに参加、来年のボストン・マラソン(1953年優勝から50年)にも参加予定の旨のご報告をいただきました。

ご参加の会員からは同好会の活動状況、近況等々のご報告があり、最後は高木政晃副会長のご挨拶のあとで、藤盛紀明副会長の3本締めで中締めとし、最近になく活発で和やかな総会を終えました。

注1)

収入¥259,522 支出¥260,999 収支差 -¥1,477

資産合計¥987,979 負債正味財産合計¥987,979